

(2023年9月27日受稿 2023年12月1日受理)

【原 著】

自閉スペクトラム症児における初期のふり遊びの発達過程

——親子間の応答関係に着目して——

つじ あゆみ (和光大学非常勤講師)

連絡先 E-mail: ayumifuhna@ybb.ne.jp

はじめに

自閉スペクトラム症児は、典型的なふり遊びをすることが難しいと指摘される（例えば Tomasello, 1999/2006, p.176）。それゆえに、ふり遊びの有無は、自閉スペクトラム症の早期発見の目安にもなっている。

ふり遊びとは、動作や言葉を使って内的なイメージを表現する遊びである（菅野, 2003, p.147）。しかし、その定義と尺度は研究者間で一致していない（Thompson, & Goldstein, 2019, p.24）。

それを踏まえ、Thompson, & Goldstein は、過去50年間の199の論文をレビューし、ふり遊びの発達段階を以下の5つに区分している。第一段階は、バナナを電話のように扱うなどある物を別の物のように使うふりであり、第二段階は、積み木を人のように歩かせるなど生命のない物に特性を与えるふりである。これらは通常1～2歳頃に見られる。第三段階は、二人以上の子どもがふりを介して社会的なやりとりするもので4歳頃に観察される。第四段階は、母親役になるなど他の人や他の物になるふりで5, 6歳頃に出現する。第五段階は、シナリオに基づき役割を割り当てるもので6歳以降に見られる。出現の時期もレベルも異なるふり遊びだが、いずれも子どもは人がしていることを見て、それを“ふり”として取り入れ、やりとりをしている。

これに関連して、Tomasello(1999/2006, p.172)は、ふり遊びを「様々な物にある意図的なアフォーダンスを切り離し、別のアフォーダンスに入れ替えて遊ぶこと」、すなわち「見立てるもの」と「見立てられるもの」を入れ替えて遊ぶことと定義している。DeLoache(2000, 2005)は、このような行動を二重表象とし、子どもは二重表象を持つことによってふり遊びを開始するとしている。では、子どもは、いつどのようにして二重表象をもつのだろうか。

Tomasello は、生後12～18か月までの子ども

と2歳の子どもの積み木を押す行為を対比し、その違いを説明している。前者は単に大人の行為を模倣しているにすぎず、後者はあるモノをあたかも他のモノであるかのように扱っているという(p.172)。その意味では、子どもがふり遊びをするようになるのは、2歳を過ぎてからとなる。また、井上(2005)は、2歳半頃になるとブロックを車に見立てて走らせたり、積み木を食べ物に見立てたりする「代用のふり遊び」(荒木・井上・立田・前田・森, 2004)が観察され始め、3歳前後にはそこには居ない特定の人を人形で代用し、日常場面を再現する遊びに拡張するとしている。

本研究では、Thompson, & Goldstein と Tomasello, 井上を参考に、2歳までに見られる“ふり”を初期のふり遊び、2歳半以降に見られる「代用のふり遊び」を中期のふり遊び、5, 6歳で観察される“ふり”を後期のふり遊びとし、一事例の自閉スペクトラム症児が初期のふり遊びをするようになる過程を探る。

初期のふり遊びを考えるに当たって、わが子の観察記録から“ふり”の発達過程を検討した麻生の研究(1996, 1997, 2002)は示唆を与えてくれる。麻生は、初期の“ふり”の発達過程を「コミュニケーション行為としてのふり」「動作による表象としてのふり」「記号的行為としてのふり」「象徴的行為としてのふり」の4つに分けて検討している。このうち、「コミュニケーション行為としてのふり」とは、生後9～12か月頃に見られるもので、他者に物を差し出してはわざとひっこめるなどの“ふり”である。「動作的表象としてのふり」とは、1歳前後に観察されるもので、空のコップで飲むふりをするなどである。「記号的行為としてのふり」とは、1歳4か月から6か月頃に観察されるもので、何もないところでモノをつまみ、口へ運び食べる真似をするなどの“ふり”である。「象徴的行為としてのふり」とは、積み木が電車になったりパンになったりするもので、2歳頃に観察される。麻生に倣えば、初期

のふり遊びは、「コミュニケーション行為としてのふり」「動作による表象としてのふり」「記号的行為としてのふり」「象徴行為としてのふり」の順に発達する。

併せて、麻生は、こうした“ふり”が対人関係のなかで生じることを強調し、人との関係のあり方と並行して変化すると述べている。最初の「コミュニケーション行為としてのふり」が観察される頃には、モノへ向かう行為が同時に人に向かう行為になり得ることを認識する「行為の共同化」が、「動作的表象としてのふり」が観察される頃には、自己と他者とを基本的に同型な存在として組織する「自他の同型性」が、「記号的行為のふり」が出現する頃には、相手や人形に飲ませる「表象的レベルの交替遊び」をするようになる。その意味では、初期のふり遊びは、他者との関係性の変化に伴い発達していくといえる。

では、他者との関係を形成することが難しい自閉スペクトラム症児は、どのような過程を経て初期のふり遊びをするようになるのであろうか。辻・別府（2020）は、母親とのやりとり場面における観察記録の記述内容をもとに、発達年齢2歳の自閉スペクトラム症児がふり遊びをするようになる過程を分析した。その結果、対象児は、「動作的表象としてのふり」を基盤に「象徴的な行為としてのふり」をするようになったこと、「表象的レベルでの交替遊び」をするようになった後に「役割交替遊び」をするようになったことが示された。しかし、記述内容から、“ふり”のレベルを厳密に分類することはできておらず、また、これらの“ふり”が観察された時の対象児と母親との応答関係も詳細に分析することもできていない。

本研究では、辻・別府（2020）で分析した親子のビデオ記録を再分析し、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びの発達過程を親子間の応答関係との関連から明らかにすることを目指す。本研究の仮説は、以下の3点である。第一に、初期のふり遊びの発達過程では、「コミュニケーション行為としてのふり」「動作による表象としてのふり」「記号的行為としてのふり」「象徴的行為としてのふり」の順序性がみられる。第二に、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びは、自他関係の変容に伴い発達する。第三に、親子の応答関係、特に三項関係が成立すると、モノを介したやりとりが活発になり、初期のふり遊びが展開する。

1. 方法

【対象児】

200X年11月生まれの男児（S児）。1歳半健診

にて要観察と言われ、その後2歳半の時に医療福祉センターにて自閉スペクトラム症と診断された。それを機にA市の児童発達支援センターに通うようになった。対象児の全体的な発達の様相を新版K式発達検査2001の結果から示すと、3歳3か月時点では、姿勢・運動 Developmental Age（以下DAと略す）2:4（Developmental Quotient（以下DQと略す）72、認知・適応 DA1:10（DQ56）、言語・社会 DA2:0（DQ62）、全領域 DA2:0（DQ62）であった。観察終了（4歳3か月）時点では、姿勢・運動 DA3:10（DQ92）、認知・適応 DA4:1（DQ98）言語・社会 DA3:0（DQ72）、全領域 DA3:5（DQ82）であった。

【倫理的配慮】

観察をする前に養育者に対して研究の主旨を説明し、親子のやりとり場面を観察しビデオに録画すること、ならびに研究論文として発表することについての承諾を書面で得た。

【分析資料】

200Y（X+3）年6月より9か月間（S児3歳6か月から4歳3か月まで）、A市の児童発達支援センターにて、毎月1、2回20分程度の親子のやりとり場面を観察し録画した（全16回）。本研究では、このうちの“ままごと”場面を分析対象とした。使用する玩具を選定するに当たって、母親からS児の好きな食べ物を聞き取った。そのうえで、S児の好きな食べ物の玩具とコップや包丁などの玩具を2組ずつ揃えた。

【分析手続き】

手続き1. データ起こし

最初に、“ままごと”場面での対象児と母親の行動と発話の記録を作成した。作成に当たって、ビデオ記録を見ながら、対象児と母親の一つの発話とそれに伴う行動を一つ一つ書き出した。ここでは、1回の発話とそれに伴う行動を一つの言動とした。ただ、対象児、もしくは母親が言葉を発することもないまま、何らかの行動を示すこともあった。この場合は行動のみを書き出し、それも一つとした。

手続き2. 「初期のふり遊び」の分類

“ままごと”場面で観察された初期のふり遊びを、麻生（1996）を参考に、「コミュニケーション行為としてのふり」「動作的表象としてのふり」「記号的行為としてのふり」「象徴的行為としてのふり」の4つに分類した（以下、「コミュニケーション行為」「動作的表象」「記号的行為」「象徴的行為」と表記する）。このうち、自閉スペクトラム児では「動作的表象」は可能であっても「象徴的行為」が難しいとの指摘もある（麻生、1997、p.47）。本研究では、「記号的行為」を「観察学習」「延滞模倣」「仮想的置き換え」「シニフィアンとしての戯れ」の4つに

下位分類し (Table1), 「記号的行為」から「象徴的行為」への移行プロセスを丁寧に見ていくことにした。

次に, 初期のふり遊びに関連する行動を「行為の共同化」「自他の同型性」「表象的レベルでの交替遊

び」の3つに分類した。ここでは, 対象児が“ふり”をする際に母親を見た場合を「行為の共同化」とし, 母親が行った“ふり”を対象児が真似た場合を「自他の同型性」, 「する－される」という役割を交替した場合を「表象的レベルでの交替遊び」とした。

Table1 初期のふりとそれに並行して生じる行動の分類

カテゴリ	定義	例
コミュニケーション行為 【9～12か月】	・モノへ向かう行為が, 同時に人に向かうコミュニケーションにもなるふり。	・大人にモノを差し出してはわざとひっこめる。 ・(禁止されているモノに手を触れようとして) 背後にいる大人の顔を伺う。
	・行為の共同化	・三項関係の成立。 ・ふりをする際に母親を見る。
動作的表象 【1歳前後】	・ある身ぶりによって現前している対象に明確に意味を付与するふり。	・実物大のバナナやミカンの写真に口を押し付ける。 ・空のコップから飲む真似をする。
	・自他の同型性	・自己と他者を同型的な存在として認識する。 ・母親が行ったふりを模倣する。
記号的行為 【1:4～1:6頃】	・身ぶりが記号として機能を持ち始めるふり。 ・不在の人や出来事をリファーするふり。	◎観察学習 ・道具を用いた活動を目撃した後に同じ活動を行う。 ・大人が手をたたいて蚊を取っていたのを見た後で, 両手をパチンとたたいて手のひらをみつめる。
		◎延滞模倣 ・大人との対話による「共同想起」を支えにするふり。 ・大人に「あかん (=タン)」と叱られ, 泣いた他児のことを思い出し, 「タン, タン」「エーン」と泣きまねをし, 出来事を伝える。
		◎仮想的置き換え ・何もないところでつまんで食べるふりをする。 ・鍋を触って「アチイ」と熱がるふりをする。 ・キャラクターの特徴について言及する。
		◎シニフィアンの戯れ ・現実の指示対象との結びつきを離れて自由に戯れる。 ・黄色の積み木がバナナや電車になったりする。
	・表象的レベルでの交替遊び (動作 / ことば)	・「する－される」という役割を交替する。 ・母親に食べさせる。 ・「アリガトウードウイタシマシテ」 ・母親 / 子どもが店員役になると相手は客役になる。
象徴的行為 【2歳頃】	・指示対象Xは, シニフィアンAによってもシニフィアンBによってもリファーされるふり。	・子ども自らがXをYに見立てるふり。 ・「ミテ, シンゴウ (ミタイ)」と言う。

註: 【 】は通常観察されるおおよその月齢を示す。

手続き3. 「応答関係の成立／未成立」

対象児と母親とのやりとりは, 明確な開始の合図も終了の合図もないまま展開したこともあって, 始発の働きかけを特定することが難しかった。そこで, 最初に, やりとりの始発となる働きかけを, 発話を伴うものに限定した。次に, 平石 (2015) の分類基準を参考に, 「働きかけ」を「促し」「要求」「調整」「評価」に分けた。さらに, 「働きかけ」に対して相手が応じたものを「応答」とした (Table2)。

「働きかけ」や「応答」のなかには, 同じ言葉や行動を繰り返す場合と, 「促し」「要求」「調整」「評

価」「促し」を重複して働きかけたり応答したりする場合があった。同じ言葉や行動を繰り返す場合は, 一つの「働きかけ／応答」とし, 重複する場合は, 文脈に沿って内容を分け, 別個の「働きかけ／応答」とした。また, 母親が働きかける直前に対象児が無言で何らかの行動をした場合には, 母親の「働きかけ」に含め, 応答直後に相手が共感する行動を示した場合には「応答」に含めた。

上記の手続きに則り, 一つの働きかけに対する一つの応答を親子間の「応答関係」とした。「応答関係」は, 対象児の発話による働きかけに対して母親が応

答する場合としない場合の2パターン、母親の発話による働きかけに対して対象児が応答する場合としない場合の2パターン、合計4パターンに分けられた。このうち、対象児／母親の働きかけに対して相手が応答した場合を「応答成立」とし、相手が応答しなかった場合を「応答未成立」とした。ここでは便宜上子ども（Child）＝「C」、母親（Mother）＝「M」、働きかけ（Work）＝「W」、応答する（Respond）

＝「R」、応答しない（Not Respond）＝「NR」と略記した。これに準じて、子どもの働きかけに対して、母親が応答した場合（Child Works on his mother, then Mother Responds）を「CW-MR」と表記し、子どもの働きかけに対して、母親が応答しなかった場合（Child Works on his mother, but Mother does Not Responds）を「CW-MNR」と表記した（Table3）。

Table2 「働きかけ－応答」の内容

働きかけ		応答
カテゴリ	サブカテゴリ	内容
促し	注意喚起	呼名する、「見てて」と注意喚起する
	提示・提案・教示	玩具や動作を提示する やり方を示す：「こうやってやるんだよ」
	指差し	玩具などを指さす
要求	命令・要求	要求する：「～したい」
調整	問いかけ	問いかける：「～するの？」
	自分の行動説明	自分の行為を伝える：「～するよ」
	相手の行動説明	行動を説明する：「こうしなかったんだ」
評価	肯定的評価	称賛・承認・受容：「上手だね」「すごいね」
	否定的評価	拒否・否定・制止：「投げちゃダメ」

Table3 「応答関係」の分類

働きかけ	応答	略記	内容（例）
子・働きかける	母・応答する	CW-MR	子どもが「コレ、ドウゾ」と母親に渡すと、母親はそれを受け取る。
	母・応答しない	CW-MNR	子どもが母親を見て「パクパク」と食べるふりをしても、母親は子どもを見ない。
母・働きかける	子・応答する	MW-CR	母親が切るふりをして見せると、子どもも真似て切る。
	子・応答しない	MW-CNR	母親が「カンパイしよう」と子どもにもコップを向けるが、応じない。

手続き4. 「モノを介したやりとり」の成立／非成立

初期のふり遊びと三項関係の成立との関連を調べるために「モノを介したやりとり」を抽出した（Table4）。

ここでは、母親が対象児を呼名し、もしくは、対象児が「ミテ」と言って、モノを介してやりとりが始まった場面を「モノを介したやりとり」とした。このうち、呼名や「ミテ」により「モノを介したや

りとり」が開始し、両者の間で少なくとも2回以上やりとりが往復した場合、すなわち「M（呼名）→C→M→C…」 「C（ミテ）→M→C→M…」を「モノを介したやりとり成立」とし、2往復しなかった場合、すなわち「M（呼名）→C→（M）」 「C（ミテ）→M→（C）」を「モノを介したやりとり未成立」とした。

Table4 「モノを介したやりとり」の定義

カテゴリ		定義
モノを介したやりとり	・母親発信 母親の呼名によりやりとりが開始	成立
		・母親が子どもを呼名した後で、やりとりが始まり、そのやりとりが2往復以上継続した場合：「M（呼名）→C→M→C…」
	・子ども発信 子どもが「ミテ」と言うことによりやりとりが開始	未成立
		・母親の呼名に応じて子どもが母親やモノに注意を向けたものの、そのやりとりが継続しなかった場合：「M（呼名）→C」
		成立
		・子どもが「ミテ」といってやりとりが開始し、そのやりとりが2往復以上継続した場合：「C（ミテ）→M→C→M…」
		未成立
		・子どもが「ミテ」といってやりとりが開始したものの、そのやりとりが継続しなかった場合：「C（ミテ）→M」

手続き 5. 「初期のふり遊び」のエピソードの抽出

「ふり遊び」のエピソードを以下の手順に沿って抽出した。最初に「コミュニケーション行為」「動作的表象」「記号的行為」「象徴的行為」のいずれかの行為を含むエピソードを抜粋した。このうち、「記号的行為」については、「観察学習」「延滞模倣」「仮想的置き換え」「シニフィアンとしての戯れ」に該当するものがあれば、それらを抜粋した。次いで、抜粋したもののなかに「行為の共同化」「自他の同型性」「表象的レベルの交替遊び」があるか否かを確認し、これらを伴う代表的なエピソードを選出した。ただし、対象児が「ふり遊び」を介して母親と関わろうとしたにもかかわらず、母親がその意図をくみ取ることがなかったものもあった。ここでは、その代表的なものも選んだ。

手続き 6. 評定

評定は、筆者と特別支援教育士 1 名（以下「評定者」と略記）の 2 名で行った。評定に当たって、録画したビデオ映像と Table1 と Table2、Table3 を示しながら、分類および評定の方法について口頭で説明した。そのうえで、録画した映像と対象児と母親の行動と発話の記録を渡し、その後独立して評定するようにした。評定者間の一致率は、初期のふり遊びで 96.3%、応答関係で 77.2% であった。評定が一致しない項目については、筆者と評定者で協議し、再分類した。

2. 結果

2-1. 時期区分について

「記号的行為」のサブカテゴリが出現した回を調べた結果、4 回目に「仮想的置き換え」が、11 回目に「観察学習」が観察された。そのため、1 回目から 3 回目を第Ⅰ期、4 回目から 10 回目を第Ⅱ期、11 回目から 16 回目を第Ⅲ期として分類した。なお、この時期区分は、辻・別府（2020）と同じであった。

2-2. 初期のふり遊び

（1）初期のふり遊びの推移

初期のふり遊び全体をみた場合、「動作的表象」が最も多く全部で 437 回（63.6%）観察された（Table5）。次いで、「記号的行為」が 215 回（31.3%）であった。「象徴的行為」は 27 回（3.9%）、「コミュニケーション行為」は 8 回（1.2%）と少なかった。

各期の初期のふり遊びをみると、第Ⅰ期には「動作的表象」が 33 回（100%）観察されたのみであった。第Ⅱ期には「動作的表象」が 230 回に増加したが、全体の割合は 100% から 66.9% に減少した。この時期に「記号的行為」「象徴的行為」「コミュニケーション行為」が初出し、それぞれ 93 回（27.0%）、

14 回（4.1%）、7 回（2.0%）観察された。回数こそ少ないものの、「コミュニケーション行為」は、総出現回数 8 回のうち 7 回（87.5%）観察された。

第Ⅲ期になると、「動作的表象」は 174 回（56.1%）に、「コミュニケーション行為」は 1 回（0.3%）に減少した。対して、「記号的行為」は 122 回（39.45%）に増加した。これは「記号的行為」総出現数の 56.7% に当たる。「象徴的行為」は 13 回（4.2%）で、第Ⅱ期とほぼ同じであった。総じて、第Ⅰ期では「動作的表象」が、第Ⅱ期では「コミュニケーション行為」が、第Ⅲ期では「記号的行為」が多かった。

「記号的行為」の内訳をみると、「記号的行為」のうち「仮想的置き換え」は第Ⅱ期に 93 回（100%）、第Ⅲ期に 120 回（98.4%）であった。第Ⅲ期に「観察学習」が 2 回（1.6%）観察されたが、「延滞模倣」と「シニフィアンの戯れ」はいずれの時期にも観察されなかった。

Table5 「初期のふり遊び」の推移

期	出現数	コミュ 行為	動作的 表象	記号的 行為	象徴的 行為	小計
Ⅰ 期	回	0	33	0	0	33
	%	0.0	100.0	0.0	0	100.0
Ⅱ 期	回	7	230	93	14	344
	%	2.0	66.9	27.0	4.1	100.0
Ⅲ 期	回	1	174	122	13	310
	%	0.3	56.1	39.4	4.2	100.0
小 計	回	8	437	215	27	687
	%	1.2	63.6	31.3	3.9	100.0

註：「コミュニケーション行為」を「コミュ行為」と表記。

（2）初期のふり遊びと「関連する行動」との関連

初期のふり遊びに関連する行動（以下、「関連する行動」とする）の出現回数をみると、「行為の共同化」が全部で 66 回（32.8%）、「自他の同型性」が 65 回（32.3%）、「表象的レベルでの交替遊び」が 70 回（34.8%）であった（Table6）。その推移をみると、第Ⅰ期には「自他の同型性」が 3 回（100.0%）観察されたのみであった。第Ⅱ期には、「行為の共同化」が 28 回（45.2%）、「自他の同型性」が 20 回（32.3%）、「表象的レベルでの交替遊び」が 14 回（22.6%）観察された。「行為の共同化」と「表象的レベルでの交替遊び」はこの時期に初出した。第Ⅲ期には、「自他の同型性」が 42 回（30.9%）、「行為の共同化」が 38 回（27.9%）観察された。第Ⅱ期に比べて、「行為の共同化」の割合が 45.2% から 27.9% に減少した。対して、「表象的レベルでの交替遊び」は 56 回（41.2%）観察された。第Ⅲ期には、「行為の共同化」の全出現回数 66 回中 38 回（57.6%）、「自他の同型性」全 65 回中 42 回（64.6%）、「表象

的レベルでの交替遊び」全70回中56回（80.0％）観察された。これら全ての行動は第Ⅲ期に増えた。

Table6 「初期のふり遊び」に関連する行動の推移

期	出現数	行為の 共同化	自他の 同型性	交替遊び	小計
Ⅰ期	回	0	3	0	3
	%	0.0	100.0	0.0	100.0
Ⅱ期	回	28	20	14	62
	%	45.2	32.3	22.6	100.1
Ⅲ期	回	38	42	56	136
	%	27.9	30.9	41.2	100.0
小計	回	66	65	70	201
	%	32.8	32.3	34.8	99.9

註：「表象的レベルでの交替遊び」を「交替遊び」と表記。

2-3. 応答関係

（1）「応答関係」の成立／未成立

「応答関係」全体をみると、「MW-CR」が1200回（34.7%）と最も多く、次いで「CW-MNR」が835回（24.2%）と多かった（Table7）。これは、母親の働きかけに対象児が応答したことを、その一方で、対象児の働きかけに母親が応答していないことを示唆している。

Table7 「応答関係」の推移

期	出現数	MW- CR	MW- CNR	CW- MR	CW- MNR	小計
Ⅰ期	回	112	89	21	88	310
	%	36.1	28.7	6.8	28.4	100.0
Ⅱ期	回	579	348	331	386	1644
	%	35.2	21.2	20.1	23.5	100.0
Ⅲ期	回	509	313	318	361	1501
	%	33.9	20.9	21.2	24.1	100.1
小計	回	1200	750	670	835	3455
	%	34.7	21.7	19.4	24.2	100.0

各期の割合を見ると、第Ⅰ期では「MW-CR」が112回（36.1％）と最も多かった。次いで、「MW-CNR」が89回（28.7%）、「CW-MNR」が88回（28.4%）、「CW-MR」が21回（6.8%）であった。第Ⅰ期は、母親から働きかけることが多く、全体の60％以上であった。

第Ⅱ期では、順に「MW-CR」が579回（35.2％）、「CW-MNR」が386回（23.5%）、「MW-CNR」が348回（21.1%）、「CW-MR」が331回（20.1%）であった。第Ⅱ期になると、対象児から母親に働きかけることが増えた。第Ⅲ期では、「MW-CR」が509回（33.9％）、「CW-MNR」が361回（24.1%）、「CW-MR」が318回（21.2%）、「MW-CNR」が313

回（20.9%）であった。いずれの時期も「MW-CR」が30％以上で一番多く見られた。「CW-MR」は第Ⅱ期から20％程度見られるようになった。

（2）「モノを介したやりとり」

「モノを介したやりとり」のうち「M発信」の推移を確認した。「成立」は、第Ⅰ期が5回（11.6%）、第Ⅱ期が54回（30.0%）、第Ⅲ期が69回（39.0%）であった。「M発信」は、第Ⅱ期に「成立」が30%、第Ⅲ期には40%弱になった。

「C発信」の推移を確認したところ、第Ⅰ期には「成立」も「未成立」もなかった。第Ⅱ期になると「成立」が28回（80.0%）観察され、第Ⅲ期には13回（52.0％）観察された。第Ⅱ期に増加した「成立」は第Ⅲ期には再び減少した。

Table8 「モノを介したやりとり」の推移

期	出現数	モノ（M発信）			モノ（C発信）		
		成立	未成立	小計	成立	未成立	小計
Ⅰ期	回	5	38	43	0	0	0
	%	11.6	88.4	100.0	0.0	0.0	100.0
Ⅱ期	回	54	12	180	28	7	35
	%	30.0	70.0	100.0	80.0	20.0	100.0
Ⅲ期	回	69	10	177	13	12	25
	%	39.0	61.0	100.0	52.0	48.0	100.0
小計	回	128	272	400	41	19	60
	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（3）初期のふり遊びに関するエピソード

「ふり遊び」に関するエピソードをTable9に示した。ここでは「考察」にてこれらを例示し論考した。

3. 考察

3-1. 初期のふり遊びの発達過程

本研究の結果、対象児の初期のふり遊びが「動作表象」より「コミュニケーション行為」が遅れて出現したことが示された。よって、初期のふり遊びの発達過程では、「コミュニケーション行為としてのふり」「動作による表象としてのふり」「記号的行為としてのふり」「象徴的行為としてのふり」の順序性がみられるとした仮説1は支持されなかった。

「記号的行為」のうち「仮想的置き換え」が4回目に、「観察学習」が11回目に観察された。しかし、「延滞模倣」や「シニフィアンの戯れ」は一度も観察されなかった。「観察学習」と「延滞模倣」の違いが大人との対話による共同想起の有無にあるならば（麻生，1996，p.66），対象児は母親の行動を見ただけに再現することはあっても、対話を通して体

験を共同想起することはなかったといえる。さらに、「シニフィアンとしての戯れ」が現実の指示対象との結びつきから離れ、自由に戯れるようになるのであれば（麻生，1996，p.89），対象児にとってある記号を柔軟に変化させていくことは困難であったといえる。

その意味では、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びの困難は、「仮想的な置き換え」をすることや目撃したことを再現する「観察学習」にあるのではなく、それを他者と共有し共同想起することや状況に応じてシニフィアンを柔軟に変えていくことにあると推測される。

Table9 「初期のふり遊び」のエピソード

期	観察回	エピソード
Ⅰ期	1 回	・母親が「イタダキマス」と言ってホットケーキを食べるふりをして見せると、S児は、母親を見ることもなく、ホットケーキを口につけ、「アーン」と言って食べるふりをする。（6/24）
	4 回	・母親がS児を見てスプーンを掬って飲むふりをし、「おいしい」と言うも、S児は「オリョウリ」と言ってスプーンで鍋を混ぜ始める。それを見たMが「お料理、美味しい」「なぜませ」といってS児を真似る。（8/6）
Ⅱ期	5 回	・母親が「オイシイ」と言ってホットドックをS児の口に向けると、S児は母親を見て、「アーン」と言って食べるふりをする。（8/20） ・大きな口を開けてハンバーガーを食べた後で「お母さんにもちょうだい」と言われ、母親の口にハンバーガーを近づけ食べさせる。（8/20）
	6 回	・「タベル」と言ってウィンナーを口に入れたS児に対して母親が「ソレ、タベナイ」と言う。S児は再び母親を見て「タベル」と言ってウィンナーを口に入れようとする。それを見た母親が「タベナイ」と言うとS児はにやりと笑う。（9/10）
	6 回	・S児が「ハイル」といって玩具箱に入り、その中に座る。母親は「箱、入らないよ、お風呂じゃないよ」と言う（9/10）
	7 回	・母親がS児にハンバーガーを差し出すと、S児は「ゴハン、タベル」と言ってハンバーガーに口をつける。その後、立ち上がり洗面台に向かう。母親が「食べて」と呼びかけるも、蛇口をひねり、再び「ゴハン、タベル」と言い、母親の方へ向かう。（9/24）
	11 回	・S児が包丁とキュウリをもって洗面台に向かう。その際、S児が母親を振り返ってみると、母親は「洗ってきて」と言ってS児に付き添う。S児は、蛇口にキュウリと包丁を蛇口に近づけた後、包丁を振って机に戻る。それを見ていた母親が「それも観てるし」と言って笑う。（12/17）
Ⅲ期	11 回	・母親が容器からコップに注ぐふりをする、S児はコップを見て「モウナイ（入っていない）」と言い、母親にコップを見せる。母親が「アルヨ」と言って飲むふりをする、母親を真似て飲むふりをする。（12/172）
	15 回	・母親が「何にしますか？」とメニューを提示すると、S児は「エット、ハンバーガーと」と言う。その後、母親が「今後はお母さん、注文するよ。ホットケーキとアイスをください」というと「ハーイ」と言って食べ物を並べ始める。（2/25）
	16 回	・（母親のハッピーセットを作る目的で）「オカアサンノダッタ」と皿を取り出し、母親の前に食べ物を並べ始める。母親が「お母さんの後で注文するから」と言うも「アレ、オカアサンノ」と言って食べ物を探す。（3/11）

註：（ ）は観察月日を示す。

3-2. 自閉スペクトラム症児における初期のふり遊び

（3-2-1）自他関係との関連から

「動作的表象」が観察された第Ⅰ期に「自他の同型性」が確認され、「コミュニケーション行為」が観察された第Ⅱ期に「行為の共同化」が確認された。また、「記号的行為」が増加した第Ⅲ期に「表象的レベルでの交替遊び」が最も増えた。この結果は、初期のふり遊びとこれらの行動が関連していることを示唆している。よって、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びは、自他関係の変容に伴い発達するとした仮説2は支持された。その意味では、自閉ス

ペクトラム症児の初期のふり遊びも自他関係の変容に伴い発達するといえる。この点を深めるために、初期のふり遊びが出現した時のエピソードを交えて考察する（Table9）。

第Ⅰ期には、【母親が「イタダキマス」と言ってホットケーキを食べるふりをして見せると、S児は、母親を見ることもなく、ホットケーキを口につけ、「アーン」と言って食べるふりをする。】（6/24）が観察された。これは、ホットケーキの玩具にそのアフォーダンスを当てはめ、半ば慣習的に行ったものであろう。Tomasello（1999/2006）は、エミュレーション学習と模倣学習を区別し、その違いを以下の

ように説明している。エミュレーション学習とは、自分が知らなかったことを人がその物にするのを見て、その物のアフォーダンスを生み出す学習プロセスである。それは、環境内の変化に焦点を当てたものであって、他者の行動に注目したものではない。一方、模倣学習は、子どもが他者と同じ目標をもって他者の行動を再現するものであり、三項関係の成立に伴って可能になる。その意味では、母親を見ることもなく、「動作的表象」を示した第Ⅰ期の対象児の行動は、母親と同じ目標をもって母親を模倣していたとは言い難い。それゆえに、この時期に観察された「動作的表象」は模倣学習ではなく、慣習的な行動、ないしはエミュレーション学習であったといえる。

第Ⅱ期になると、【母親が「オイシイ」と言ってホットドックをS児の口に向けると、S児は母親を見て、「アーン」と言って食べるふりをする。】(8/20)が観察された。これは、対象児がふりをする際に母親を見るようになったこと、すなわち、「行為の共同化」が出現したことを示唆している。また、【「タベル」と言ってウィンナーを口に入れたS児に対して母親が「ソレ、タペナイ」と言う。するとS児は再び母親を見て「タベル」と言ってウィンナーを口に入れようとする。それを見た母親が「タペナイ」と言うとS児はにやりと笑う。】(9/10)も観察された。行為者として他者を理解するようになると、子どもは他者の行為の自分にとっての意味を理解するようになり、褒められることの意味が分かるようになったり、他者の指示に対して指示行為の意味を確認しようとする行動が出現したりする(別府, 1999)。対象児が行動の後で母親を見るようになったことや母親が制止することを故意に行い笑顔を見せたことは、母親の意図を理解するようになったためである。

第Ⅱ期に【大きな口を開けてハンバーガーを食べた後で「お母さんにもちょうだい」と言われ、母親の口にハンバーガーを近づけ食べさせる。】(8/20)が観察された。第Ⅲ期には【母親が「何にしますか?」とメニューを提示すると、S児は「エッ、ハンバーガー」と言い、母親が「今後はお母さん、注文するよ。ホットケーキとアイスをください」というと「ハイ」と言って食べ物を並べ始める。】(2/25)が観察された。これらは「する-される」を基盤に初期のふり遊びが展開するようになったことを、それが発展し遊びが広がったことを示唆している。Tomasello (1999/2006) が、ふり遊びをするようになる過程で、子どもは最初に「自分に対して」他者が何か記号的な行いをするのを理解しようとし、その後で役割を逆にして「他者に対して」同じように記号的な行いをするを指摘した。対象児がこうし

たやりとりをするようになったことは、母親が「自分に対してする」のを見て、その後、役割を逆にして「母親に対してする」ようになったためと考えられる。ただ、「される自分」から「する自分」に立場を逆転することが難しい自閉スペクトラム症児においては、大人があえて動作の切れ目で言葉をかけたり、子どもが見るまで待ったりするなどして、やりとりの構造が理解できるようにする必要がある(辻・別府, 2023)。それと同様に初期のふり遊びにおいても「する-される」関係が理解できるやりとりの構造を設ける必要があったといえる。

第Ⅲ期には、【S児が包丁とキュウリをもって洗面台を向かう。S児が母親を振り返ってみると、母親は「洗ってきて」と言ってS児に付き添う。S児は蛇口にキュウリと包丁を蛇口に近づけてから、包丁を振って机に戻る。それを見ていた母親が「それも観てるし」と言って笑う。】(12/17)が観察された。これは、母親が家で行っていたことの観察学習であろう。また、【母親が容器からコップに注ぐふりをする、S児はコップを見て「モウナイ(入っていない)」と言い、母親にコップを見せる。母親が「アルヨ」と言って飲むふりをする、母親を真似て飲むふりをする。】(12/17)も観察された。これは、対象児が「ココニハナイケレド、アル」として母親の行為を受け止めたことを示唆している。その意味では、この時期より対象児は「今、ここ」にないものもあるものとしてやりとりするようになったといえる。さらに、対象児が目的をもって行動する姿が観察された。それは【(母親のハッピーセットを作る目的で)「オカアサンノダッタ」と皿を取り出し、母親の前に食べ物を並べ始める。母親が「お母さんの後で注文するから」と言うも「アレ、オカアサンノ」と言って食べ物を探す。】(3/11)といったものである。木下(2016)によれば、自分を主体として自覚し始める1歳半頃になると、表象能力に支えられ、自分なりの目的とそこに至る手順を内面に定め、それを持続するようになるという。対象児が目的をもって行動するようになったことは、表象を基盤に自分を主体として自覚し始めたことを意味する。

総じて、対象児は第Ⅱ期に他者理解の、第Ⅲ期に自己理解の発達を遂げ、初期のふり遊びを介して母親とやりとりするようになったといえる。
(3-2-2) 三項関係との関連から

第Ⅰ期には、母親が玩具を提示するなどしても、対象児がそれに応じることは乏しかった。これは、母親の働きかけに対象児が応答することの困難を示している。また、リンゴを口につけ、「アーン」と言った対象児に母親が「おいしい」と応答してもそれが継続することもなかった。これは、対象児の働きか

けに母親が応答してもやりとりが続かないことを示唆している。その意味では、自閉スペクトラム症児とのやりとりの困難は、他者の働きかけに彼／彼女らが応答することだけではなく、彼／彼女らの働きかけに他者が応じたとしても、それが維持され、展開し難いことにもあるといえる。

第Ⅱ期以降は、対象児が「ミテ」と言ってやりとりが開始し、それが継続するようになった。これは、対象児が母親の注意を喚起し、モノを共有しようとするようになったことを示唆している。奇しくも、第Ⅱ期は、「コミュニケーション行為」が増えた時期である。「コミュニケーション行為」が「行為の共同化」すなわち、三項関係の成立と並行して出現するならば、この時期に三項関係が成立し、「コミュニケーション行為」をするようになったといえる。

第Ⅲ期には、対象児の働きかけに母親が応答するようになり、また、母親の呼名によるやりとりが開始するようになった。これは、母親が対象児の意図を汲み取り応答するようになったこと、対象児が母親の働きかけに応じてモノを介してやりとりをするようになったことを示唆している。この時期に「記号的行為」が増加していることを踏まえると、対象児と母親は「記号的行為」を共有してやりとりをするようになったといえる。ふり遊びが共同注意を伴うやりとりの拡張である (Tomasello, 2014/2021) ならば、初期のふり遊びも三項関係を基盤に拡張していくといえる。

本研究の結果、応答関係が成立し、三項関係が形成することで、自閉スペクトラム症児も初期のふり遊びをするようになることが示された。これは、本研究の仮説3「親子の応答関係、特に三項関係が成立すると、モノを介したやりとりが活発になり、初期のふり遊びが展開する」を支持するものである。同時に、自閉スペクトラム症児のふり遊びの難しさが象徴化する能力のみによるのみではなく、他者との関係性にある (Hobson, Lee, & Hobson, 2009; Hobson, Hobson, Malik, Balgiota, & Caló, 2013) とする見解とも一致する。その意味では、自閉スペクトラム症のふり遊びの困難は、現実場面と分離表象させた行為を模倣することの難しさや (明和, 2014), 実物が現存しない場面で象徴的な意味を見出すことの弱さ (Leslie, 1987) だけではなく、応答関係、特に三項関係が形成し難いことにも拠ると考えられる。

おわりに

本研究の結果、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びは、「コミュニケーション行為」が遅れて出

現すること、「記号的行為」をするようになるものの、「延滞模倣」や「シニフィアンとしての戯れ」が出現し難いことが示された。そうであっても、対象児は玩具を媒介に自らの体験を母親と共有し、役割を交替するようになった。これは、具体物を介した場合には「延滞模倣」が可能になることを示唆している。自閉スペクトラム症児の“ふり”の困難は、音声的手がかりや形象的な手掛かりがないのに『空(くう)』に再現反復し、他者と何かをコミュニケーションしているような“ふり”にある (麻生, 2001) ことを踏まえば、自閉スペクトラム症児に対しては、玩具などの具体物を介して『空(くう)』を補い、共同想起が可能になるようにしていくことが大切であろう。

三項関係の成立は、「意図を持つ行為者 (intentional agent) としての自己と他者の認識を促すと同時に、共同注意や社会的参照、模倣学習などの意図的なコミュニケーションを可能にする (Tomasello, 1999/2006, p.79)。「記号的行為」が増加した第Ⅲ期に、「行為の共同化」「自他の同型性」「表象的レベルでの交替遊び」も増えたことを鑑みると、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びも意図を持つ行為者として自己と他者の認識を基盤に発達していくと考えられる。その意味では、発達支援においては、三項関係の成立、それを通して築かれる自他の関係の発達を支える取り組みが大切であろう。

最後に、2つのエピソードを通して、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びの難しさを検討する。一つに、6回目に対象児が「ハイル」と言って道具箱の蓋の上に座り込むことがあった(9/10)。それを見た母親は、「お風呂じゃない」と言ってやりとりを終結させた。対象児の側からすると、蓋はお風呂に見立てられており、「(オフロニ) ハイル」“ふり”をしたものと推測される。しかし、対象児の意図は母親には伝わっておらず、その行為を介してやりとりが展開することはなかった。こうした背景には、対象児が「シニフィアンを自由に入れ替えて遊ぶことはないだろう」とする母親の思い込みがあったと推測される。二つに、7回目から対象児が「タベル」と言って部屋内にある洗面台に向かう姿が観察された(9/24)。対象児の側からすると“ままごと”であっても、食べる前には手を洗うものだったのではないだろうか。しかし、水へのこだわりがあることもあって、母親は「水遊びに発展すること」を懸念し制止した。こだわりを有する自閉スペクトラム症児においては、大人が子どもの“ふり”を“ふり”として受け止めることが難しくなることもあるのではないだろうか。こうした“ずれ”は、自閉スペクトラム症は、想像する力が弱い、こ

だわりがある，事象を共有する力が弱いという先入観によって生じており，それが自閉スペクトラム症児の見せる行動を発達的に意味のある行動としてとらえることを難しくしているのではないかと推測される．その意味では，自閉スペクトラム症児も特異性を示しながらも，ふり遊びをするようになることを実証し，それを支援していくことが大切であろう．

謝辞

本研究は，「人間発達研究所研究科（2021-23年）」の修士論文である．執筆に当たって，研究科の先生方と木下孝司先生よりご指導を，査読者の方々よりご助言をいただきましたこと，心より感謝申し上げます．また，本研究に快く協力してくれたS君とお母様，データを分析に協力してくださった小村千紘さん，ご助言をいただきました伊藤武彦先生にお礼を申し上げます．最後に，自閉スペクトラム症のふり遊びに関する視座を示してくださった別府哲先生に感謝いたします．

文献

- 荒木穂積・井上洋平・立田幸代子・前田明日香・森光彩（2004）．高機能自閉症・アスペルガー障害児の発達と教育的対応：ふり遊びの分析から．障害者問題研究，32（2），131-138．
- 麻生 武（1996）．ファンタジーと現実．金子書房．
- 麻生 武（1997）．乳幼児期の“ふり”の発達と心の理解．心理学評論，40（1），41-56．
- 麻生 武（2001）．動作の表象としての“ふり”：身ぶりを通して世界を意味づける．人工知能学会誌，16（4），560-566．
- 麻生 武（2002）．乳幼児の心理：コミュニケーションと自我の発達．サイエンス社．
- 別府 哲（1999）．挑発行為を頻発した自閉症幼児における他者理解の障害と発達．発達心理学研究，10（2），88-98．
- 別府 哲（2012）．コミュニケーション障害としての発達障害．臨床心理学，12（5），（通巻71号），652-657．金剛出版．
- 別府 哲（2013）．自閉症スペクトラム児における社会性の障害と発達．乳幼児医学心理学研究，22（2），79-90．
- DeLoache, S. J.（2000）．Dual representation and young children's use of scale models．Child Development, 71（2），329-338．
- DeLoache, S. J.（2005）．子どもは象徴をどう理解するのか．日経サイエンス，2005年11月号，33-38．
- 平石文香（2015）．乳幼児期における養育者の逆模倣が子どもの模倣の発達過程におよぼす影響の分析．白百合女子大学大学院文学研究科，博士論文，1-146．

- Hobson, R. P., Lee, A., & Hobson, A. J.（2009）．Qualities of symbolic play among children with autism: A social-development perspective. Journal of Autism Developmental Disorder, 39, 12-22．
- Hobson, A. J. Hobson, R. P., Malik, S. Balgiota, K.& Caló, S.（2013）．The relation between social engagement and pretend play in autism. British Journal of Developmental Psychology, 31, 114-127．
- 井上洋平（2005）．自閉症児に対するふり遊び研究の成果と課題．立命館人間科学研究，（8），29-40．
- 菅野幸弘（2003）．集団ふり遊びの想像的即興的側面について．弘前大学教育学部紀要，89，147-157．
- 木下孝司（2016）．「1歳半の節」に関する発達心理学的検討：1歳児における自我形成を考えるための理論的視座．障害者問題研究，44（2），90-97．
- Leslie, A.（1987）．Pretense and representation: The origins of “theory of mind”. Psychological Review, 94, 412-426．
- 明和政子（2014）．真似る・真似られる：模倣の発達の・進化的変遷．岩波講座 コミュニケーションの認知科学3．母性と社会性の起源．51-82．岩波書店．
- Thompson, N. B., & Goldstein, R. T.（2019）．Disentangling pretend play measurement: Defining the essential elements and developmental progression of pretense. Developmental Review, 52, 24-41．
- Tomasello, M.（1999）．The Cultural Origins of Human Cognition．大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓（訳）（2006）．心とことばの起源を探る．勁草書房．
- Tomasello, M.（2014）．A natural history of human thinking. Harvard Universal press．橋 彌和秀（訳）．（2012）．思考の自然誌．勁草書房．
- 辻あゆみ・別府 哲（2020）．自閉スペクトラム症幼児におけるふり遊びの発達と支援．岐阜大学教育学部紀要，人文科学，68（2），111-120．
- 辻あゆみ・別府 哲（2023）．自閉スペクトラム症児における交替的やりとりの発達．心理学，44（2），103-122．

要 旨

辻・別府（2020）は、母親とのプレイセラピー場面における観察記録の記述内容をもとに、自閉スペクトラム症児が初期のふり遊びをするようになる過程を示した。しかし、記述内容から、“ふり”のレベルを厳密に分類することはできておらず、また、これらの“ふり”が観察された時の対象児と母親との応答関係も詳細に分析することもできていなかった。本研究では、辻・別府（2020）を再分析することにより、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びの発達過程を自他関係と応答関係との関連から明らかにすることを目指した。ここでは、一組の自閉スペクトラム症児と母親とのプレイセラピー場面で観察された初期のふり遊びを、麻生（1997）の基準を参考に、「コミュニケーション行為」「動作表象」「記号的行為」「象徴的行為」に分類し分析した。その結果、対象児の初期のふり遊びは、第一に、「コミュニケーション行為」が「動作表象」よりも遅れて出現すること、第二に、自他関係の変容と関連して発達していくこと、第三に、母親との応答関係、特に三項関係が成立するなかで出現してくることが示された。よって、自閉スペクトラム症児の初期のふり遊びは、自他関係、および応答関係が変容するなか、三項関係が成立すると発達していくと同時に、意図を持つ行為者として自己と他者の認識を基盤に発達していくと考えられる。自閉スペクトラム症児に対する発達支援においては、三項関係の成立、それを通して築かれる自他の関係の発達を支える取り組みが大切である。

キーワード 自閉スペクトラム症 初期のふり遊び 自他関係 応答関係 三項関係

Abstract

Beginning of Pretend Play on the Play Therapy for a Child With Autism Spectrum Disorder
Focusing on Responsive Relationships Between a Child and His Mother

TSUJI Ayumi*

*Adjunct Professor at Wako University

Tsui and Beppu (2020) showed the process of pretend play in a child with autistic spectrum disorder based on the descriptions in the observation records on the play therapy with his mother. However, it was not possible to strictly classify the level of "pretending" from the descriptions, nor was it possible to analyze in detail the responsive relationships between the subject and his mother when "pretending" was observed. In this study, I reanalyzed Tsui and Beppu (2020) and aimed to clarify the beginning of pretend play in children with autistic spectrum disorder regarding self-other relationships and responsive relationships. Here, I analyzed the pretend play observed in the play therapy categorizing it into "communicative acts" "enactive-representing acts" "referring acts" and "symbolic acts" referring to Aso's (1997) criteria. The results showed that firstly, "communicative acts" appeared later than "enactive-representing acts", secondly "communicative acts" developed concerning the transformation of self-other relationships, and thirdly, "enactive-representing acts" appeared in the process of establishing a responsive relationships, especially the triadic relationship. The pretend play of children with autism spectrum disorder is considered to develop when the triadic relationship, the transformation of the self-other relationships and responsive relationships are established. In developmental support for children with autism spectrum disorder, it is important to work to support the establishment of triadic relationship, including shared attention.

keywords: autism spectrum disorders, pretend play, self-other relationships, responsive relationships, triadic relationship